

熱狂と現実の狭間で

——「ヴァンフォーレ甲府」あるいは「城福甲府」は、山梨を変えるのか——

稲田 聡子

1 はじめに —ヴァンフォーレという「特異点」—

2012年11月17日、甲府駅北口は異様な熱気に包まれていた。

11日に新山梨県立図書館が開館し、駅前でのイベント開催も重なって毎日5000人以上が北口に殺到していたのだが、その日、最も人々の注目を集めたのは図書館ではない。サッカーJ2（当時）・ヴァンフォーレ甲府（以下ヴァンフォーレ）の優勝パレードだった。そこにあったのは、長く山梨に住む筆者も見たことがない、熱狂としか言いようのない風景だった。

ヴァンフォーレは歴史的経緯もあり、地域との精神的距離が非常に近いという点で特異なチームである。ところが、熱狂が頂点に達したJ2優勝からの経過を調査してみると、その距離の近さが実際の収益には反映されていないことが明らかになった。

本稿は、特にヴァンフォーレが盛り上がりを見せた2012年～2014年の城福浩監督体制時代（以下「城福甲府」）を含む近年の各種統計を中心に、熱狂と現実のギャップについて分析すると共に、ヴァンフォーレ、そして山梨に何が起きているのかを把握し、同時に諸問題の解決策を探ることを目的とする。

2 概観

ヴァンフォーレの歴史は1965年、前身である「甲府サッカークラブ」の結成に遡る。

後に県サッカー協会の会長となる川手良萬の呼び声で、県内高校サッカー部OB、関東大学リーグOBなどが結集し、地域密着型アマチュアクラブとして活動を開始した。

1995年に「ヴァンフォーレ甲府」と名称変更、1997年に「株式会社ヴァンフォーレ山梨スポーツクラブ（以下ヴァンフォーレクラブ）」として法人化。しかし、この後も経営難が続き、J2に加盟しながらも成績は低迷する。

2000年、ヴァンフォーレクラブに約4億円の累積赤字があることが判明し、ヴァンフォーレクラブは「存続の危機」を迎える。だが、山日YBSグループから派遣された海野一幸

(現ヴァンフォーレクラブ会長)が驚異的な営業手腕を発揮し、ヴァンフォーレクラブは単年度黒字へと一気に転換する。さらに、関係者・地域住民、全国のＪリーグサポーターなどが存続運動に加わり、「存続の危機」を乗り越えた。地域住民はその後、スポンサーやサポーター、ボランティアスタッフなどとしてヴァンフォーレクラブを支えている。

Ｊ２下位に低迷していたチーム成績は、大木武が監督に就任して以降急上昇。数度の監督交代を経ながらＪ１昇格とＪ２降格を繰り返すレベルにまで達する。2012年、Ｊ２に降格したチームは、監督に城福浩を招聘。この年、チーム史上初めてのＪ２優勝を経て、Ｊ１に昇格。2014年シーズン終了と同時に城福は退任するが、翌年もチームは引き続きＪ１への残留を果たしている。

一方、山梨は四方を山に囲まれた、人口約83万人（平成27年11月現在・「常住人口調査」）の県である。県面積の多くは山岳地であり、居住人口は甲府盆地に集中する傾向がある。行政区分としては本来中部地方に属するが、実際は「首都圏」「関東甲信越」という位置づけで、行政事務のほとんどは関東地方として取り扱っている。

県の主要産業は農業と、宝飾やワイン・食品等の製造業、および観光サービス業で、特に平成25年に富士山が世界文化遺産に登録されてからは外国人を中心とする観光客が急増している。一方で、個人事業主が全事業所の４割と全国的な水準よりも高く（「平成26年経済センサス」を基に算出）、併せて交通・輸送手段がほぼ自動車に限定されることもあってか、大規模企業の誘致に苦慮するなど、経済的には厳しい状態に置かれている。

文化的には中西部の「くになか国中」と東部の富士北麓の「ぐんない郡内」に区分される現象が見られ、同じ山梨県民でも方言や生活様式の違いが少なくない。また、地域や出身校、同業者などという括りで密度の高いコミュニティを形成することが多く、出資金を出し合って互助会的組織を運用し、飲食店等で定期的な会合を開く「むじん無尽」という古い仕組みが現在に残っていることでも知られている。

なお、サッカーに限定していえば、アマチュアクラブが古くから活動してきたほか、元日本代表の中田英寿を輩出した韮崎高校や、ここ数年では山梨学院大学附属高校、帝京第三高校など、高校サッカーの有力校が複数存在している。

3 「城福甲府」の熱狂とその矛盾

3.1 Ｊ２優勝からＪ１残留記録の更新まで

2012年にヴァンフォーレの監督に就任した城福は、ゼネラルマネージャー（以下GM）である佐久間悟と示し合わせた上で、就任直後から「プロヴィンチア」⁽¹⁾という言葉を用いてきた。「プロヴィンチア」は、地域に密着した経営や運営を行い、地元住民の支持を集めるサッカークラブのことであり、大企業とスポンサー契約を結び、潤沢な経営資金を背景にスター選手の補強や設備投資を行う「ビッグクラブ」と対をなしている。城福がこの言葉を頻繁に口にしたのは、ヴァンフォーレを地域の「文化」として意識させることが重要と考えていたからだと思われる。そしてこの年ヴァンフォーレは、ストライカーの活躍もあり、24戦無敗というＪ２新記録を打ち立てて優勝することになる。

3度目のJ1挑戦となった2013年、外国人選手を中心に大幅な入れ替えがあったものの、ヴァンフォーレは初の2期連続J1残留を決める。しかし、残留を勝ち取るために行った戦術のシステム変更が、後に大きな影響をヴァンフォーレに与えることになる。

2014年、旧甲府サッカークラブ時代から続いていたエンブレム・ロゴをめぐる商標権等訴訟が解決し、ヴァンフォーレクラブが和解金として1億2000万円を支払うことになったため、早い段階で当期の赤字が確定した。さらにシーズン当初に山梨が豪雪に見舞われ、日程的にも経営的にも大きな影響があった。だが、山梨県が観光客開拓先として有望視していたインドネシアから選手を獲得して話題を集め、さらにベテラン勢が奮起するなど明るい材料もあり、ヴァンフォーレは過去最高の13位で3年目の残留を決めた。そして、城福はこの年で契約満了によりチームを離れることとなり、いわゆる「城福甲府」体制は惜しまれながら終了した。

2015年、ヴァンフォーレは前身の甲府サッカークラブ結成から50周年を迎え、節目の年に過去最高順位でのJ1残留を目標に掲げる。しかし、樋口靖洋を監督に迎えたチームは、主力選手の移籍、外国人選手の相次ぐ離脱の影響などもあり最下位に低迷。その後、樋口に代わって佐久間がGM兼任監督となると成績は回復した。さらに、過去にヴァンフォーレに在籍していた外国人選手が復帰し即戦力となるなどして、ヴァンフォーレは苦戦しながらも前年と同じ13位でシーズンを終えた。

3.2 クラブハウス設置と練習場問題の「改善」

2012年の優勝パレード当日、山梨県韮崎市の市長から、韮崎中央公園にヴァンフォーレの屋内練習施設つきクラブハウス（練習の拠点となる施設）を設置し、韮崎中央公園グラウンドをヴァンフォーレの練習使用に優先提供する旨の発表があった。そして、翌年10月に整備が完了し、練習環境の改善が図られた。

実は、ヴァンフォーレは長い歴史を持っていながら、屋内練習施設つきクラブハウスも専用練習場も持っておらず、大量の練習用資材を抱えて県内のグラウンドを転々とする生活を送ってきた。その経緯を知っているサポーターは、「クラブハウスとグラウンドの確保はJ2優勝の成果だ」と歓喜した。しかし、この年ヴァンフォーレクラブは、2013年にJリーグで導入された「クラブライセンス制度」により、クラブハウスや優先練習場を設置せざるを得ない状況にあったのだ。

「クラブライセンス制度」は、欧州サッカー連盟がチャンピオンズリーグ（各国の上位チームが対戦するリーグ）の参加資格として導入したのが始まりで、後に国際サッカー連盟や、日本が所属するアジアサッカー連盟も導入した。そのためJリーグも、アジアチャンピオンズリーグへの参加にあたって「クラブライセンス制度」を導入することになった。

「クラブライセンス制度」の審査基準は、①競技基準、②施設基準、③人事組織基準、④法務基準、⑤財務基準に分けられており、このうち②施設基準についてヴァンフォーレクラブは著しく不足していた。その中でも「常時使用できる天然芝もしくは人工芝のピッチ1面及び屋内トレーニング施設、クラブハウスの保有」はライセンス付与に関して必須条件であり、至急整備する必要がある。さらに⑤財務基準については、「3期連続で当

期純損失を計上した場合」もしくは「債務超過」の場合はライセンスを付与しないという、非常に厳しいものが適用されている。結果として、ヴァンフォーレクラブは新規の用地を取得する形ではなく、現存の施設の中で施設基準を満たす工夫をしなければならなかったことになる。

タイミングとしては「J 2 優勝のご褒美」に見えたクラブハウス・優先練習場設置だが、優勝の機運に乗った部分はあるとしても、実際は経営上の必要に迫られて作った側面があることを忘れてはいけない。

3.3 専用スタジアム運動の低迷と入場者数・クラブサポーターの減少

2012年の優勝を受け、県内各方面から、サッカー専用スタジアム建設を期待する声が上がった。現在ヴァンフォーレがホームゲームで使用している山梨中銀スタジアムは、陸上競技場のためピッチとスタンドの距離が遠い上、収容可能人数が少なく、さらにバリアフリーを意識した作りになっていないため集客に難があるとされてきた。そこで、2019年のラグビーワールドカップ、2020年の東京オリンピックでのキャンプ誘致を見据え、ヴァンフォーレクラブは2014年、山梨県サッカー協会、山梨県ラグビーフットボール協会、山梨県アメリカンフットボール協会とともに、フットボール専用スタジアム建設を山梨県に対して要望し、同時にスタジアム建設を求める署名運動を展開した。この活動は県外にも波及し、結果として95,000人以上の署名が集まった。

同年9月、山梨県に対してこの署名が提出され、その場には当時のJリーグチェアマンの村井満も駆けつけ、防災面も含めて専用スタジアムの必要性を強調した。しかし、こうした活動にも拘わらず、行政の動きは鈍い。原因としては大型公共工事となり、予算や用地取得の面でハードルが高いという点もあるが、同時にホームゲームの入場者数が減少しているということが挙げられる。現在のスタジアムを埋められない状況では、より収容人員を増やした専用スタジアムの実現は難しいと言わざるを得ない。

ヴァンフォーレがJ 1 に昇格した2013年以降で言えば、J 1 全体の入場者数は増加している。一方、ヴァンフォーレ甲府の年間入場者数は、214,441人（2013年）、206,904人（2014年）、192,042人（2015年）と、辛うじて1試合当たりの入場者数は1万人を超えているものの、その減少幅は年々多くなっている。

さらに、ヴァンフォーレクラブの収入を安定的に支えるはずのクラブサポーター数も伸び悩んでいる。ヴァンフォーレクラブ提供の資料によると、クラブサポーター口数は8,186口（2013年）、7,033口（2014年）7,838口（2015年）と、増減を繰り返しているように見えるが、内訳を見ると、個人会員（年間シートを購入する会員）が5,768口（2013年）、5,265口（2014年）、5,176口（2015年）と減少が止まらず、その差分を法人会員と、協力会員（年間シートを購入しない会員）が下支えする状態となっている。

一体、ヴァンフォーレと山梨に何が起こっているのか。そして、現状は変え得るものなのか。以下、この点を中心に考察する。

4 考察

4.1 クラブ側の現状認識

ヴァンフォーレクラブの経営に関しては、2000年に主要株主である山日YBSグループ・山梨県・甲府市・韮崎市からなる「ヴァンフォーレ甲府経営委員会」が結成され、経営状況や当期目標について定期的な報告等がなされている。

2015年3月に行われた第28回ヴァンフォーレ甲府経営委員会で提示された「経営状況の推移」では、経常利益が約3,700万円（2012年）、約3,100万円（2013年）、約600万円（2014年）と大きく減少している様子が窺える。Ｊリーグが公開している「Ｊクラブ個別経営開示資料」と合わせて詳細に検証すると、入場料収入や広告料収入は増加しており、各種費用も圧縮するなど経営努力がされていることは明白なのだが、外国人選手の頻繁な入れ替えによる人件費や、試合運営費の増大、Ｊリーグ配分金の減少、クラブサポーター収益の減少などにより、確保したはずの経費が削られている現状が読み取れる。

前述したクラブライセンス制度の関係で、万一2015年決算が赤字となった場合、2016年まで連続赤字を計上すると、ヴァンフォーレはＪリーグからの退出を余儀なくされる。ヴァンフォーレは、2001年の「存続の危機」以来の経営危機に直面しているのだ。

一方、収入減の主な理由である入場者数減少について、ヴァンフォーレクラブ側からは要因として①県内人口の減少、②企業の撤退、③可処分所得の減少、④試合のマンネリ化等に起因するクラブサポーター会員の減少が提示されている（「第28回ヴァンフォーレ甲府経営委員会『事業報告』」）。こうしたクラブ側の認識は、果たして現状と一致しているのか。各項目の検証と考察を行う。

4.2 県内人口の減少

山梨県の人口動態については本来「国勢調査」を基本統計とするべきだが、ここでは月毎の動態について詳細に分析するため、山梨県が発表している「山梨県常住人口調査」（推計調査）を採用する。

ここ5年の推移を見ると、山梨県は毎年6,000人程度人口が減少していることがわかる。そのうち3,000人程度が自然減（死亡者数が出生者数を上回るために起こる減少）、残り3,000人程度が社会減（転出等による減少）である。今と同じペースで人口が減少すれば、2020年には山梨県の人口が80万人を切る計算となる。もちろん、山梨県もこの状況に危機感を抱いており、2015年9月に発表した「ダイナミック山梨総合計画素案」では、各種施策によって将来的には人口を100万人規模とすることを掲げている。だが現状を見る限り、よほど大きな社会的転換がなければ計画実現は難しいと言わざるを得ないだろう。

さて、これをヴァンフォーレの現状に引き戻して考えてみる。

ヴァンフォーレクラブ提供のサポーター年齢階層別内訳（個人・法人・協会員員の口数でカウント）を見ると、2015年では18歳以下が約12.5%、19～30歳が約6.9%、31歳～40歳が約14.0%、41～50歳が約23.9%、51～60歳が約20.7%、61～70歳が約13.4%、71歳以上が

約4.8%となっている⁽²⁾。人口自然減のペースを考えると、現在の61歳以上のサポーターが抜けていく中、層の薄い30歳以下のクラブサポーターを早急に開拓する必要があると言えるだろう。

現在、ヴァンフォーレクラブでは、4月のホームゲームにおいて「フレッシュャーズさんいらっしゃい」という企画を行っている。新学期や新年度において生活環境の変わる人々を対象としてチケットを安価で提供するというもので、このような企画を利用してスタジアムに足を運んだ若者が、また訪れたいと思うような環境にしていけるかが問われていると言えよう。

一方、社会減に対しても打つ手がないわけではない。まず、現在のクラブサポーター会員が県外に転出する場合、個人会員から協会員に種別変更する形でいいので、とにかく繋ぎ止めることが重要となる。ヴァンフォーレが興味の対象であり続け、スタジアムに足を運ぶきっかけであり続ける必要があるのだ。試合のカードによっては、観光業の強みを活かし、会員限定という形で交通・宿泊などをセットにしたツアーを作ることで、ワンストップでスタジアムまでのルートを手配できるシステムを構築することも必要だろう。

また転入者に対しても、地元でJリーグの試合を観られることを積極的に宣伝していった方がいい。特に山梨県の人口動態を月毎で見ると、4月と10月には人口増が見られる傾向があり、こういった時期に学校やスポンサー企業を通してより重点的な宣伝活動を行う余地はあると思う。ヴァンフォーレクラブでは転入者向けの新たなサービスも検討していると聞いているので、今後の展開に期待したい。

4.3 企業の撤退

企業や従業員数の動態については、総務省統計局の「経済センサス」で把握することができる。

山梨県内の事業所数（公務除く）は47,901（2009年）、44,084（2012年）、44,243（2014年）と推移しており、一方従業者数は380,250人（2009年）、367,195人（2012年）、386,283人（2014年）となっている。確かにこの間、大企業の撤退・事業所閉鎖のニュースは度々あったが、直接的に入場者数やクラブサポーター数を減らすような有意な変化は見受けられない。だが、これを個人事業主数で見た場合、景色が一変する。山梨県内の個人事業主数の経年変化を見ると、24,535（2009年）、21,789（2012年）、19,785（2014年）と明らかに減少している。前述のように、山梨県は事業所の4割を個人事業主が占めているが、その個人事業主が事業撤退を余儀なくされている状況が読み取れる。実は、この個人事業主の減少こそが、ヴァンフォーレクラブの経営に大きな打撃を与えていると考えられる。

元々ヴァンフォーレクラブは、赤字になった時にそれを広告料等の名目で補填する大企業、いわゆる責任企業を持っていない。スポンサーのほとんどが中小・零細企業や個人事業主であり、そのスポンサーを獲得するためにヴァンフォーレクラブが努力してきた歴史を持っている。その努力の象徴とされるのが、山梨中銀スタジアムで掲出される看板広告の多さである。これはJリーグ内でも有名な話で、サッカーを題材にした漫画に取り上げられるほどになっている⁽³⁾。さらに、選手が怪我をしたときに使用される担架、スタジア

ム内を走るカートの屋根まで広告で埋められており、営業活動は上限まで行われていると言っている。

残念ながら、個人事業主の減少、それに伴うスポンサー撤退への有効な打開策を筆者は持ち合わせていない。ただ、事業所数全体は有意に減少しているわけではないので、引き続き新規事業所を中心にスポンサーを地道に開拓していく必要があるだろう。

一方、筆者がスタジアム周辺の状況を観察していると、開場から試合開始までの間、スタジアムに隣接して開設される「ヴァンフォーレパーク」で、接待を兼ねながら商談を行う個人事業主の姿が複数見られた。ヴァンフォーレには試合という「興行」だけでなく、「興業」の可能性も秘められているのだ。

既に「ヴァンフォーレパーク」では露店のほか、企業ブース・自治体ブース等の出展も行われている。また、地元の商業高校や大学と連携し、学習の場・ビジネス体験の場としても機能している。これに合わせて、起業家のためのミニ出展・商談スペースを設けることができれば、地域経済の振興と新規スポンサーの獲得という効果を得られると筆者は考える。出展にはテント半分くらいのスペースがあれば十分だ。昨今のフリーマーケットや展示会の出展料金を考えれば、起業家側の広告費用としても決して高くはないだろう。

ビジネスパートナーとしてヴァンフォーレが大きな役割を果たし得るのだと周知することができるかどうか。それが新規スポンサー獲得の鍵ではないだろうか。

4.4 可処分所得の減少

山梨県民の可処分所得の状況は、山梨県が発表している「県民経済計算年報」で把握できる。今のところ2012年までの数字しか出ていないが、世帯家計における可処分所得（個人事業主含む）については、特に急激な増減もなく、年間195万円、月あたりに換算すると16万円程度で推移している。消費税増税等の経済要因がどう影響しているかは現時点では不明だが、少なくとも公的に発表されている統計の中には、目に見えて可処分所得が減っているという有意な数的根拠はない。

一方、Jリーグの「スタジアム観戦者調査」を見てみると、「1ヶ月にレジャーに使えるおこづかいの額」という設問があり、ヴァンフォーレ観戦者についての回答平均値は31,800円（2011年）、31,700円（2012年）、30,500円（2013年）、40,100円（2014年）と推移している。少なくともスタジアムに足を運んでいる層は、ある程度の経済的余裕を持った状態で臨んでいることが窺える。それでもヴァンフォーレの場合、クラブサポーターの個人会員が一番安い席種でも24,000円なので、個人会員になることは決して安い買い物ではない。

スタジアムに足を運んでいる人々と、そうでない人との収入・可処分所得に差はあるのか、現段階ではそれを分析する手立てはない。特に、若い世代の非正規雇用化がスタジアム離れに影響しているのかは気になるところではあるが、「スタジアム観戦者調査」の統計を見る限り、いわゆる「ビッグクラブ」に若い世代が多く足を運んでいる傾向もあるので、一概に非正規雇用化が影響しているとも断じがたい。

以上の限られた材料から考えても、可処分所得の問題は、言い訳になりこそすれ、問題

の解決策を生み出す議論にはつながりにくいと思った方がいい。むしろ、仮に可処分所得が減ったとしても、他の支出を調整してでもスタジアムに足を運びたいと思わせることができるかどうか、その環境をいかにして構築するかを検討した方が早いと考えられる。

4.5 試合のマンネリ化

ここ数年、筆者は何度も山梨中銀スタジアムを訪れて試合観戦をしているが、最近の試合を観ていて楽しいと思えなくなっていた。周囲の話を聞くと、この感想は筆者だけが抱えているものではないようだ。なぜ観客は、楽しんで観戦することができなくなったのか。

実は「城福甲府」時代、ヴァンフォーレは戦術を大きく変更している。

2013年、初のJ1残留を目指していた「城福甲府」は、失点が重なり降格圏の16位まで追いつまれていた。そこで、城福は最終ラインの守備を4人体制から3人体制に大きく変更したのだ。3人体制という数だけ見ると守備が手薄になっているように見えるが、実際は守備のタイミングで前のラインからさらに2人が降りてきて、実質5人で守る体制になる。いわゆる「5バック」という守備重視の布陣だ。

だが歴史的に見ると、ヴァンフォーレはどちらかという攻撃重視のチームだった。古くからのサポーターは、「守備ガラ空きでどんどん点入れて、その結果負けてJ2に落ちても応援は止めない」と公言する。それに、2011年に監督に就任し、成績不振で途中解任された三浦俊也が守備的な布陣を好んだ歴史もあるので、ヴァンフォーレサポーターは、守備的布陣に対して潜在的に強い拒否感を持ってきた。

結果的に城福は「5バック」導入によってJ1残留を実現し、今や「5バック」はヴァンフォーレの基本戦術となっている。しかし、それと引き換えにヴァンフォーレは攻撃力を削ぐことになった。「城福甲府」時代に入場者数が減り続けたのは、守備重視の試合に対してサポーターが抱いた「違和感」の表れではないかと筆者は考えている。

城福は「やっていて、見ていて面白いフットボール」を志向し、守備的であっても選手にハードワークを強く要求したため、「城福甲府」時代はまだ試合に動きがあった。だが、城福がヴァンフォーレを離れた後は、「5バック」がJ1残留のためのルーティーンとして残り、補強がうまくいかなかったことも相俟って試合全体を重苦しい空気が包むようになった。おそらく、実際にピッチに立っている選手自身も、強い閉塞感を抱いていただろう。城福はJ1昇格・残留という「光」と共に、閉塞感という「闇」を残していったと言える。

もちろん、試合に負けないことは大切であり、経営上J1に残留することも重要である。だが、本当にそれは観ていて面白い試合なのか。友人知人を招待した時に、満足させることができる試合なのか。「興行」において必須の「見る／見られる」という視座が、どこか置き去りにされている。それが入場者数の減少に少なからず拍車をかけているように筆者には思えてならない。

4.6 隠れた問題 ―サポーターの分断―

筆者が山梨中銀スタジアムの状況を観察している中で、強く感じたことがある。それは、

「サポーターの分断」が起こっているということである。

この「サポーターの分断」には二つの要素が含まれる。一つはサポーター同士の分断、もう一つはサポーターとヴァンフォーレクラブの分断である。

サポーター同士の分断については、私設応援団HINCHAS（インチャス）に属するサポーターと、他のサポーターとの見解の相違から生まれている部分が多い。

HINCHASに関しては、ゴール裏（文字通りゴールの裏側で立ち応援などをするエリア）で度々トラブルを起こしており、それに嫌気が差したサポーターや、恐怖を感じたサポーターが別のエリアで観戦するようになるという動きもあった。また、HINCHASの応援に対する意識も、スタジアムに停滞感を与えている。例えば、2015年に導入されたチャント（応援歌）に、次のようなものがある。

声のかざり歌え 力のかざり跳ねろ 今日には負けられない 勝利をつかめコウフ
（「コーコーコー」）

この歌詞からは、ピッチ上の選手を応援する要素は微塵も感じられない。まるで応援している自分たちを鼓舞するかのような姿勢は、確実にゴール裏の規模を縮小しつつある。

一方、サポーターとヴァンフォーレクラブとの関係は本来良好で、試合前後に「ヴァンフォーレパーク」でサポーターと経営陣が談笑するような場面が度々見られる。さらに2ヶ月に一度、ヴァンフォーレクラブとサポーター団体のミーティングも行われており、決定的に関係が断絶しているわけでもない。ところが、筆者が最も強い断絶を感じたのは、皮肉にもヴァンフォーレクラブがある呼びかけを行った、2015年の山梨中銀スタジアム最終戦であった。

この日、マッチデープログラム（試合の案内や選手紹介を行うリーフレット）に挟み込む形で、クラブ側から「2016シーズンクラブサポーター会員入会へのお願い」という文書が配布された。内容はクラブサポーター数が減少傾向にあり、今シーズンは「微増」しているが、家族・友人へクラブサポーター入会を勧めて欲しい、というものだった。

呼びかけ自体は至極真っ当な内容だ。だが、クラブサポーター会費収入が減っているという事実、それに、クラブサポーターのうち減っているのは「個人会員」だということをクラブ側は開示しなかったのだ。さらに、試合終了後のセレモニーにおける呼びかけの際に、2015年1月期決算が15年ぶりに単年度赤字になったことにも触れなかった。

地縁・血縁が強い山梨という地域にあって、今いるサポーターを使って集客を図るのは一見効果的に見えるかもしれない。だが、現状はそうっていない。サポーターがなぜ家族や友人をスタジアムに招かないのか、ヴァンフォーレクラブは早急にクラブサポーターに対してアンケートなどを行い、彼らが口に出して言えない「本音」について把握をする必要があるのではないか。

かつて、ヴァンフォーレクラブは「存続の危機」を乗り越えてきた。その危機は、約4億円の累積赤字という不都合な真実を開示して初めて認識されたものだ。今ヴァンフォーレクラブが直面している危機も、十分な現状把握と情報開示を行い、サポーターやスポンサーの全面的な協力を得ることによってのみ回避され得るものではないだろうか。

5 おわりに ―ヴァンフォーレ、そして「城福甲府」という閉ざされた世界―

2015年シーズン途中でGM兼任監督に就任し、2016年も引き続きそのポジションに留まった佐久間は、「(GM講座の講師であった) ローガン・テイラー氏の話にのっとってファンと結婚する覚悟で仕事をしているんです」⁽⁴⁾と述べている。実際、佐久間ほどスポーツの「公共性」を理解している指導者はいないと思われるし、年600回余りの社会的活動をこなし、同時に下部組織アカデミーの育成にも一定の成果を上げているヴァンフォーレクラブは、「公共性」という部分では成功しているだろう。これは観客にも伝わっていて、「スタジアム観戦者調査」では、山梨中銀スタジアム観戦者の54%余りが、観戦の動機やきっかけとして「クラブが地域貢献しているから」という理由を挙げている。

しかし、「興行性」という点でヴァンフォーレクラブが成功しているかということ、非常に厳しい状態にあると言わざるを得ない。実際、スタジアムに足を運ぶ人数が減っており、クラブサポーター個人会員も減っている今の状況は、「客離れ」そのものだからだ。

自分たちが支えてきたはずのヴァンフォーレから、なぜ皆離れていくのか。今回は統計数値を中心とした考察だったためうまく描出できない部分があったが、少なくともこの現象は、社会状況によってのみもたらされているわけでないことは十分証明できたと思う。

同時に、「興行性」が満たされていないことは、山梨中銀スタジアムがある意味閉ざされた世界であることを示唆している。「スタジアム観戦調査」では、ホームクラブ、すなわちヴァンフォーレを応援に来ている観客の90%以上が、山梨県内在住者であることが明らかになっている。城福は様々なメディアで、「人口80万人余りの県で、週末に1万人が集まるといのはすごいこと」⁽⁵⁾と述べてきた。だが、明らかに人口が減っている山梨に住んでいる人間だけで、この数字を満たせなくなることは時間の問題だ。県外からのアクセスを確保し、より多くの人に門を開かない限り、入場者数減少・クラブサポーター数減少を食い止めることは不可能だろう。

人を呼び寄せるための「興行性」は「非日常性」と表裏一体で、いつもの人間が集まる、いつもの風景を変えることによって担保される。だが、それが実は一番難しい。変化させる決断ができるかどうか、鍵を握っているのはヴァンフォーレクラブというよりも、いつもの人間たるサポーター、そして山梨県民の方だ。

「城福甲府」は、日本のトップリーグで戦うクラブが定常的に自分の街にあることの誇りを山梨に伝えた。だが同時に、その熱狂の裏側でヴァンフォーレ、そして山梨はこのままでいいのかという大きな問いを突き付けていった。その問いに危機的状況にある今、答えを出さなければならない。「城福甲府」をただの良き伝説にしないこと、そしてヴァンフォーレを地域の中に取り入れ直し、真に山梨の「文化」とすることが求められているのだ。

逆風の中、ヴァンフォーレは2016年シーズンを迎える。

【注】

- (1) 「プロヴィンチア」は、日本の県に相当する行政区域を指す「provincia」というイタリア語から来ており、「プロヴィンチャ」「プロヴィンチャーレ」と表記されることもある。現在ではサッカーの地方クラブを指す言葉として広く使われている。
- (2) この統計では合計が100%にならないが、これは統計数値の中に、代表者の年齢が不明な法人会員が含まれるためである。差分については、法人会員と解釈して差し支えない。
- (3) 『週刊モーニング』No.2・3 (2016.1.8) に掲載された「GIANT KILLING」では、ヴァンフォーレ甲府をモチーフにしたとされる「ヴァンガード甲府」なるチームが登場し、看板広告の話題のほか、苦しい補強事情についても描かれている。
- (4) 「ヴァンフォーレ甲府はメディアになっている」. 田中直樹. Jクラブ強化論. ぱる出版, 2013
- (5) 例えば、田邊雅之. 「初めて明かす甲府での3年間の秘話。城福浩が語るプロヴィンチャの苦悩。」 <http://number.bunshun.jp/articles/-/822328?page=6> (accessed 2015-12-23)

【参考文献】

ヴァンフォーレ甲府公式ホームページ <http://www.ventforet.jp/>
 VENTFORET KOFU from FCK sin' 1965 甲府サッカークラブ・ヴァンフォーレ甲府創立50年の歩み, ヴァンフォーレ山梨スポーツクラブ・FCK 甲府サッカークラブOB会, 2015
 Jリーグ.jp <http://www.jleague.jp/>
 がんばれヴァンフォーレ甲府 http://www.pref.yamanashi.jp/kikaku/vf_kofu.html
 やまなしの統計 http://www.pref.yamanashi.jp/toukei_2/
 政府統計の総合窓口e-Stat <https://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/eStatTopPortal.do>
 フットボールサミット第20回「ヴァンフォーレ甲府 プロヴィンチアの流儀」. カンゼン, 2014
 城福浩. Jリーグサッカー監督 プロフェッショナルの思考法. カンゼン, 2012

【謝辞】

今回、ヴァンフォーレ山梨スポーツクラブから、未公開の統計情報をご提供いただいた。心からお礼を申し上げたい。

(いなだ・さとこ 千葉大学大学院文学研究科修士課程日本文学専攻1999年修了)